

Chaucer の “The Summoner’s Tale” における “Ire”

(“Ire” in Chaucer’s “The Summoner’s Tale”)

柴 田 竹 夫

Takeo SHIBATA

1

チ ョ ー サ ー (Geoffrey Chaucer, 1340?-1400) の『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*) において、カンタベリー巡礼者の一人、Friar (托鉢修道士)¹⁾ が、彼の話 (“The Friar’s Tale”) を語り終えると、これを聴いていた巡礼者の一人、Summoner (教会裁判所召喚吏)²⁾ は、「怒り」(ire, 1667)³⁾ のために心が狂ったようになって、体をぶるぶる震わせる。

This Sumonour in his styropes hye stood;
Upon this Frere (=Friar) his herte was so wood
That lyk an aspen leef he quook for ire. (1665-8)

この “The Friar’s Tale” は、summoners と悪魔 (the devil; feendes;

Sathanas) の関係を暴き, summoners を散々こき下ろした話であって, それゆえにこれを聴いていた Summoner は, “ire” で体を震わせたのである。

この Summoner は, こう言い返す。friars こそが地獄 (helle) を知っており, friars と悪魔はそうかけ離れてはおらず, この Friar がかつて天使によって地獄につれてゆかれた折, そこで friars が悪魔の尻の穴 (1694; 1705) (“The Summoner’s Tale” における “ars-metrike” にまつわる屁の話とつながる) に巣くっているのを目の当たりにするも, 彼の魂は, しかし神の慈悲により元通り身体に戻るけれども, friars が代々受け継ぐ悪魔の尻の穴が心に残り, 恐怖のために身を震わせたのだと。

この様に “The Friar’s Tale” において, summoners と悪魔の関係を散々に言われ, “ire” に身体を震わせる語り手 Summoner は, 今度は “The Prologue to Summoner’s Tale” において, friars の方こそが悪魔と密接な関係があると揶揄し, friars こそが偽りの嘘つき (ye han herd this false Frere lye) (1670) であり, この呪われた托鉢修道士 (“this cursed Frere”) (1707) と罵りながら巡礼者の皆の前で意趣返しをしていくわけである。かくして “The Summoner’s Tale” (「教会裁判所召喚吏の話」) は始まる。

『カンタベリー物語』には二種類の「物語合戦」がある。一つは, 宿の亭主 (Host) を話の審判役として, 巡礼の往復において一番面白く (solace) て為になる (sentence) 話をした語り手に, 宿の亭主が巡礼後ご馳走しようというものであり, もう一つは, 例えば, “The Friar’s Tale” と “The Summoner’s Tale” の様に, 各語り手が面白くて為になる話を競うのではなく, 二人の語り手が互いに意趣返しをする物語合戦の形である。summoners と friars は当時犬猿の仲と言われており, これら二つの物語はそれを反映している。

この Friar の怒りを初めとして, “The Summoner’s Tale” においては, 様々な怒りが渦巻いている。本稿では, “The Summoner’s Tale” における「怒り」(ire) の意味を分析する。それはとりもなおさず “The Summoner’s Tale” において Summoner が嘘つき呼ばわりする Friar の真実の姿を浮き彫りにする。

次に Friar と、教会での説教と、喜捨の様子を見てみる。friars の仕事は主に教会での説教 (to preche) と世俗社会での托鉢 (to begge) である。

ある日のこと Friar は、とある教会で説教する。彼は煉獄にいる死者の魂の救済のためミサを行うように勧めたり、神のために喜捨を願ったりする。実際はどうかというと教会を建てるという名目のもと、彼が目指すのは、ひたすら彼自身への喜捨である。

Friar は頭陀袋を下げて杖を持ち、家という家を覗き込み、托鉢を行う。

And beggeth mele and chese, or elles corn. (1739)

その口上は次の様である。

“Yif us a busshel whete, malt, or reye,
A Goddes kechyl, or a trype of chese,
Or elles what yow lyst, we may nat cheese,
A Goddes halfpenny, or a masse peny,
Or yif us of youre brawn, if ye have eny;
A dagon of youre blanket, leeve dame,
Oure suster deere—lo! Heere I write youre name—
Bacon or beef, or swich thyng as ye fynde.” (1746-53)

Friar の求めるものは、食物、金品、その他人々の持っているものならなんでもござれ。ところが Friar の連れの召使は、まるでその人のために神に祈ってやろう (1745) といわんばかりに、喜捨してくれた人の名前を奉納帳に書き込んだかと思えば、尻から全部消し去る。

A sturdy harlot wente ay hem bihynde,
That was hir hostes man, and bar a sak,
And what men yaf hem, leyde it on his bak.
And whan that he was out at dore, anon
He planed away the names everichon
That he biforn had writen in his tables;
He served hem with nyfles and with fables. (1754-60)

Friar は喜捨してくれた人のために祈ることもない。只喜捨を集めては、馬鹿げた話や嘘に現を抜かすばかり。

ここに Friar の “preche” し “begge” しながら、実はそれは形ばかりで、かれの真の目的は、おのれの物質的欲望に根ざした喜捨の求めであることが露わになる (Cf. “this false Frere lye” [1670]; “this cursed Frere” [1707])

Friar は、今は病で床にに臥せる信者 Thomas とは約二週間ぶりに会うのだが、いかにも久しぶりだという Thomas の口ぶりに次の様に反論する。

“God woot,” quod he, “laboured I have ful soore,
And specially for thy savacion
Have I seyde many a precious orison,
And for oure othere freendes, God hem blesse!
I have to day been at youre chirche at messe,
And seyde a sermon after my symple wit—
Nat al after the text of hooly writ,
For it is hard to yow, as I suppose,
And therefore wol I teche yow al the glose.
Glosynge is a glorious thyng, certeyn,
For letter sleeth, so as we clerkes seyn—

There have I taught hem to be charitable,
And spende hir good ther it is reasonable;
And there I saugh oure dame—A! Where is she?” (1784-97”)

Thomas の救済 (savacion) のため、他の友達のため怠ることなく何度も祈
禱を唱え、お勤めに励んでいたと言う。ここで教会のミサでは “be charitable”
であれと説教する Friar は、更に理に適う場合には、その財産 (hir good) を
使うようにとやはり喜捨を促す。信者に対する説教にはきちんとその見返りを
求める Friar である。

3

それでは次に Friar がどの様にして私腹を肥やしているか、Friar と病床に
臥す信者 Thomas と彼の女房の関わりから見てみる。

教会での説教の後、各戸を廻り、托鉢する (begge) Friar が家の主 Thomas
の所に来る (1766)。Thomas はいつも Friar を歓待する篤実な教会の信者で
ある。

この両者の関係は、単に Friar が説教師 (preacher) そして聴罪司祭 (con-
fessor) であり、Thomas が彼の信者 (lay member of your order) そして宗
教上の兄弟 (brother, 1944, 2089, 2126, 2133) である関係なのである。

Thomas はこれまで Friar の説教を聴き、罪の告解 (confess) をし、求めに
応じて喜捨する篤実な信者である。Thomas は、親愛の情を込めて彼を “deer
maister” (1781) と呼ぶ。

Friar は、Thomas に対し、今日教会のミサで Thomas の女房を見かけたが、
今いる場所を問うて彼女に会いたがり、会えば抱きしめて甘い接吻までする。
こうした態度は、宗教者として論外な態度である。

The frere ariseth up ful curteisly,

And hire embraceth in his armes narwe,
And kiste hire sweete, and chirketh as a sparwe
With his lyppes: “Dame,” quod he, “right weel,
As he that is youre servant every deel,
Thanked be God, that yow yaf soule and lyf!
Yet saugh I nat this day so fair a wyf
In al the chirche, God so save me!” (1802-9)

口達者な Friar のねらいは何かと言うと、それは金持ちの女房を籠絡して、多くの金品の喜捨をせしめること、つまり私腹を肥やすことであるのは明白である。

ここで Friar は、女房の機嫌をとることが出来たと思い、家の主 Thomas と話したいと言う。その理由をこう言う。

Thise curatz been ful necligent and slowe
To grope tendrely a conscience
In shrift; in prechyng is my diligence,
And studie in Petres wordes and in Poules. (1816-9)

自分は説教に熱心で、近頃の教区司祭とは違って怠りなく、怠け者の confession (cf. 2164, 2195, 2239, 2260, 2265, 2275) における “conscience” を優しく “grope” (1817) すると言って、いかにも熱心な仕事ぶりを強調する。

更に Friar は、自分の勤めについてこう言う。

I walke and fissue Cristen mennes soules
To yelden Jhesu Crist his propre rente;
To sprede his word is set al myn entente.” (1820-22)

ここで歩き廻ってキリスト教徒の魂を“fisshe”する（捉える、釣り上げる）とは、宗教上の勤めを果たすに熱心であるという意味の裏に、キリスト教徒の財産を“fisshe”するという目論見が隠されている。“And spende hir good ther it is resonable” (1796) という Friar の説教における主たる言葉からそのことがわかる。

そもそも Friar の言うことは、偽善的なことが根底にある。例えば、女房に食事には何が食べたいかと問われるとこう答える。

Have I nat of a capon but the lyvere,
And of youre softe breed nat but a shyvere,
And after that a rosted pigges heed—
But that I nolde no beest for me were deed— (1839-42)

Friar に見る食への貪欲さである。

Thanne hadde I with yow hoomly suffisaunce.
I am a man of litel sustenaunce;
My spirit hath his fostryng in the Bible.
The body is ay so redy and penyble
To wake, that my stomak is destroyed. (1843-7)

しかしその貪欲さを祈りと聖書によって糊塗する Friar である。その言い方も、あなたにだけはこうした私の秘密を打ち明けているんですよと、さも二人の間の親密さを強調しながらである。

Though I so freendly yow my conseil shewe
By God! I wolde nat telle it but a fewe.” (1849-50)

更なる例として、Thomas の子どもの死がある。Friar は、子どもの死を夢の啓示によって見たと言う。

“His deeth saugh I by revelacioun,” (1854)

After his deeth, I saugh hym born to blisse
In myn avision, so God me wisse! (1857-8)

Save that to Crist I seyde an orison,
Thankynge hym of his revelacion. (1867-8)

Friar は、自らの祈りについて更にこう言う。

Oure orisons been moore effectueel,
And moore we seen of Cristes secree thynges, (1870-71)

Friar の祈りは効果的で、キリストの秘事を多く見るというが、夢の啓示といい、キリストの秘事といい、自らの力を誇示しながら、その裏に自らの偽善的な意図を隠す。

We lyve in poverte and in abstinence,
And burell folk in richesse and despence
Of mete and drynke, and in hir foul delit.
We han this worldes lust al in despit. (1873-6)

Whoso wol preye, he moot faste and be clene,
And fatte his soule, and make his body lene. (1879-80)

ここにある清貧と節制の生活、快樂への輕蔑、断食、魂を太らせ体を痩せさせることについての Friar の説教は、彼の現実とは正反対である。祈りとキリストの秘事そのものは、friars に相応しいことだが、現実の Friar に照らし合わせてみると、口達者で偽善的な姿が浮かび上がる。

Friar と Thomas の女房の関わりからは、おのれの貪欲さを糊塗し、信者の財産を狙う Friar が、説教と托鉢と告解を通して言葉巧みに私腹を肥やしていることが見える。

4

次に “The Summoner’s Tale” における “ire” (Cf. The Parson’s Tale, X. 533-676) について考察する。

Friar の「甘言」につられて心を許す Thomas の女房は、自分の亭主が怒りっぽい (“as angry as a pissemeye,” 1825) から Friar にそれを叱って欲しいと彼に願う。

何をしてても亭主を喜ばせることが出来ない (1831) と嘆く女房の訴えを聞いた Friar は、「怒り」(ire) を排除するよう長々とした、しかし宗教的權威付けを伴う、博識ある説教を Thomas に始める。こうした説教は、長ければ長いほどアイロニの効果が増す。

その前提として、モーゼを初めとする過去の賢人の言葉を持ち出して言う: “Ire is a thyng that hye God defended” (1834, 1835)。怒りをなぜ避けなければいけないかについての Thomas に向けた「怒り考」の展開がここに始まる (1981より2119まで)。この説教において “ire” 及びその形容詞 “irous” は、計 15回現れる。そもそも “ire=wrath,” 「怒り」は大罪なのである (“Ire is a synn, oon of the grete of sevene,” 2005)。

Friar は、その説教において、Senek (セネカ) (2018) の權威を持ち出してこう説く。かつて Cambises という怒りっぽい (irous) 君主がいて、立派な道徳的な行為を愛していた家来の忠告を聞き入れず、かえって罪無き彼の息子を

射殺する。Friar は、この君主を “irous, cursed wrecche” (2063) と呼ぶ。続いて、怒りっぽいペルシャ人の Cirus の例をあげて、Thomas に悪魔の小刀たる怒りを捨てよ、というのも怒りは痛みを与えるからである。

Friar による「怒り考」の肥大は、すなわち Friar の偽善の肥大でもある。

Friar と病人 Thomas の関わりを辿ると、女房に対する Thomas の怒りよりも、Friar に対する Thomas の怒りがより重大な意味を持っていることがわかる。

Up springeth into th'eir, right so prayeres
Of charitable and chaste bisy freres
Maken hir sours to Goddes eres two.
Thomas, Thomas! So moote I ryde or go,
And by that lord that clepid is Seint Yve,
Nere thou oure brother, sholdestou nat thryve.
In our chapitre praye we day and nyght
To Crist, that he thee sende heele and myght
Thy body for to weelden hastily.” (1939-47)

Friar は、Thomas が「兄弟」(brother=lay member of the order) であるからこそ栄える (thryve) のであり、つつましく (humble)、純潔で (chaast)、貧しい (poore) 自分たちはキリストの福音とその御跡に従っており、慈悲深く、勤行にいそしむ者の祈りであるからこそ神の耳に届くと Thomas に甘言を使う。あまりに Friar の実際とかけ離れた姿である。

“Thomas” という呼びかけは、Friar による Thomas への説教 (1832-2119) において計19回も現れる。いかにも偽りの宗教的熱心さが現れている。

このような Friar の熱心な金に纏わる説教 (説得) だが、「病人」の Thomas は、次に見るように、彼の偽善にとうに気付いている。

“God woot,” quod he, no thyng therof feele I!
As help me Crist, as I in fewe yeres,
Have spent upon diverse manere freres
Ful many a pound; yet fare I never the bet.
Certeyn, my good have I almoost biset.
Farwel, my gold, for it is al ago!” (1948-53)

病人 Thomas の怒り (anger, 2092) による苦痛がひどいから、告解 (confessioun, 2093) を勧める Friar に対し、Thomas は、今日それは教区司祭のもとで済ませたと言って Friar への告解を拒む。

“Nay,” quod the sike man, “by Seint Symoun!
I have be shryven this day at my curat.
I have hym toold hoolly al myn estat;
Nedeth namoore to speken of it,” seith he,
“But if me list, of myn humylitee.” (2094-8)

すると Friar は即座に修道院を造るため、慈善 (charitee) のためという口実のもと喜捨を次の様に執拗にねだる。

“Yif me thane of thy gold, to make oure cloystre,”
Quod he, “for many a muscle and many an oystre,
Whan othere men han ben ful wel at eyse,
Hath been oure foode, our cloystre for to reyse.
And yet, God woot, unnethe the fundement
Parfourned is, ne of our pavement
Nys nat a tyle yet withinne oure wones.
By God, we owen fourty pound for stones.

“Now help, Thomas, for hym that harwed helle!
For elles moste we oure predicacioun.
And if yow lakke oure predicacioun,
Thanne goth the world al to destruccioun.
For whoso wolde us fro this world bireve,
So God me save, Thomas, by youre leve,
He wolde bireve out of this world the sonne.
For who kan teche and werchen as we konne?
And that is nat of litel tyme,” quod he,
“But syn Elye was, or Elise,
Han freres been—that fynde I of record—
In charitee, ythanked be oure Lord!
Now Thomas, help, for seinte charitee!” (2099-2119)

すると Thomas の Friar に対する怒りが一気に爆発する。その怒りは尋常ではなく、気も狂わんばかり (ny wood, 2121) である (cf. Friar の話を聴いて Summoner も怒りのため気が狂わんばかりになる, 1666-7)。

Thomas は、かなりの財産を喜捨させられ、嘘っぱちの偽善を重ねる Friar に対して、彼が火で焼かれたほうがいい (2122-3) と思うまでになっている。Thomas に怒りを遠避けるように説教する Friar の、鼻持ちならない偽善に堪忍袋の緒が切れたのであって、Thomas の Friar への怒りには当然の理由がある。

病人 Thomas は、彼の親しい兄弟への怒りを抱え、仕返しを思う。手始めに、兄弟には財産を上げますよと「甘言」を言って Friar の気を引く。続いて自分の生きている間に、聖なる修道院へある条件の下で寄進すると言う。その条件とは次の様である。

On this condicion, and oother noon,

That thou departe it so, my deere brother,
That every frere have also muche as oother.
This shaltou swere on thy professioun,
Withouten fraude or cavillacioun.” (2132-36)

すると Friar は、まるで魚が餌に喰らいつく様に “fisshe” されたわけで、この条件下で即座に誓う (swere, 2137), “by my faith” と言って。

Friar のこうした friars の間で別け隔て無く均等に分けるという誓いの姿こそが、偽善の一番の現れである。実際の Friar は、均等分けせず、私腹を肥やすだけである。

Thomas は、“yifte=gift” を餌にして Friar を “fisshe” したわけで、彼の考えた仕返しとは次の様なものである。それは Friar が “yift” を求めて手を Thomas の背中を伝って下にいれ “grope” (2141) するというものである。

良心を探る grope ならぬ、尻の下に秘かに隠された頂き物、gift と Friar が思い込んで grope し、結果尻を手を受けることになるという Friar の姿からは、べてん無しと誓った Friar の「見かけ」と「実体」の食い違いから来るアイロニが見える。偽善の表れである尻の穴あたりを探る (grope) つまり自分の真実の姿を自ら知らずに探るというアイロニである。

金品の gift を求めて grope し、放屁という消え行く音とにおいの gift を受け取るという、まさに空虚な説教を施し、金品を巻き上げるという偽善の姿と重なる。

あれだけ ire を遠避けることを説く Friar が、狂った獅子 (2152) の様になり、自らの真実の姿を聴衆にさらしながら、自らになされた尻の仕返し (2155) を誓うという Friar は「激怒」(with a ful angry cheere, 2158; wroth, 2161) する。

次に “false cherl” (2153) と病人の Thomas のことを偽りの下衆呼ばわりした Friar に対して村の長をはじめ他の人達は、Thomas のことをどう捉えたのかを考察する。

屁の仕返しを誓うも cherl, 下衆野郎と Thomas を侮蔑する Friar は, Thomas の家から追い出され, 激怒して仲間を今まで溜め込んだもの (人々から偽善により奪った金品) がある所に連れてゆく。それから荘園領主の館, そこは彼が聴罪司祭として常に「告解」を聴いていた立派な人物である村の長が住むが, その人に事の次第を訴える。はじめは口も利けず。Friar は, 過去自ら為してきた事に対する自己反省も無く, 自ら罪の「告解」をすることも無く, ただただ怒りが収まらない。

This frere cam as he were in a rage,
Where as this lord sat etyng at this bord;
Unnethes myghte the frere speke a word
Til atte laste he seyde, "God yow see!" (2166-9)

この荘園領主は, Friar をこう諭す。

Ye looken as the wode were ful of thevys.
Sit doun anon, and tel me what youre grief is,
And it shal been amended, if I may." (2173-5)

困り事は何かと問い掛け, できれば amende (1810; 1833; 2175; 2193) (補償する) して差し上げようとまで言う。こうした荘園領主の立場は, 逆転の「告解」である。荘園領主が "confessour" (聴罪司祭) として Friar の告解 (confession) を聴くというアイロニである。

Distempere yow noght; ye be my confessour;
Ye been the salt of the erthe and the savour.

For Goddes love, youre pacience ye holde!
Tel me youre grief.” And he anon hym tolde,
As ye han herd biforn—ye woot wel what. (2195-9)

口も聞けないほどの Friar であったが、村の長の “amende” という言葉を耳にして、ようやく Thomas にされた、自分だけでなく聖なる修道院をも冒瀆するほどのひどい仕打ちを、打ち明ける。

And yet ne greveth me nothyng so soore,
As that this olde cherl with lokkes hoore
Blasphemed hath oure hooly covent eke.” (2181-3)

Friar にとって、彼の災難 (grief) は彼のみならず教団 (hooly covent, 2183; myn order, 2191) に降りかかったものであると (説教する時常に教団を持ち出している) 大げさに述べるが、事の本質は、自らの私腹を肥やすことにあるは、おくびにも出さずに、村の長の “maister,” (2185) との呼び掛けにも “servitour,” (2185) と呼んで下さいと、わざとへりくだって、正体を隠そうとする (勿論 Friar は、自らの学識の程は「怒り考」に見られる様に十分自覚した上で)。

この時 Friar は、Thomas の女房にも事の次第を語る。病人 Thomas の事の真相を知らず、ただ Friar の言うことをそのまま鵜呑みにする彼女である。彼女は怒りっぽい亭主をよく思わないゆえにこう言う。

I seye a cherl hath doon a cherles dede.
What shold I seye? God lat hym nevere thee!
His sike heed is ful of vanytee;
I holde hym in a manere frenesye.” (2206-9)

cherl (=ill-mannered boor, ruffian) が cherl のふるまいをしたまでと女房は、扱き下ろしているが、聴衆にとっては、はじめの cherl は Thomas ではなく実は Friar を指すことを知った上でのアイロニである。

更に村の長も事の真実を知らず、Thomas は下衆 (cherl, 2218, 2227, 2232, 2238, 2241) であって、解けもしない “ars-metrike” (2222) を持ち出したのだと誤解しているわけである。

“ars-metrike” に関しても、アイロニが見られる。これは「算数」の意味と同時に、arse (=behind, 尻) に関する計算つまりは Thomas の投げ掛けた一見空虚な（尻の臭いと音という実体のない）論理問題と見えるが、村の長の従者 (lordes squire, 2243) Jankyn の提示した解決法は、Friar の真実を反映した極めて論理的なものである。この空虚な証明はとりもなおさず Friar の空虚さを端的に物語る。

Who sholder make a demonstracion
That every man sholde have yliche his part
As of the soun or savour of a fart? (2224-6)

Friar の本質を知らない人にとっては、村の長が熟考したように、Thomas は、悪魔に撮り付かれたとしか見えず、Friar も言うように、Thomas は下衆 (cherl, 2206) としか思えず、あるいは気が狂ったとしか思えない。

こうした状況の下、Friar は、Thomas の女房にこう言う。

“Madame,” quod he “by God, I shal nat lye,
But I on oother wyse may be wreke,
I shal disclaundre hym over al ther I speke,
This false blasphemour that charged me
To parte that wol nat departed be
To every man yliche, with meschaunce!” (2210-5)

彼女にとっては Thomas はあくまでも嘘つきの罰当たり (false blasphemour, 2213) に過ぎない。

ところが村の長の従者が提示した証明問題の解決法 (2253-86, 34行にわたる) によりこうした状況は一変する。

To yow, sire frere, so ye be nat wrooth,
How that this fart sholde evente deled be
Among youre covent, if it lyked me.” (2248-50)

このような学識は無いけれども、Thomas の出した難問の解決法を立派に提示した村の長の従者 Jankyn の話を聞くと、村の長も女房も誰も彼も、Friar の他は、Euclide (ユークリッド)、Ptholomee (トレミー) が言ったのと同じくらい立派だと言って、Thomas を賞賛する。

cherl と呼ばれた (2290) Thomas は、実は語り手 Summoner も言うように、“no fool,” “no demonyak” (2292) なのである。

Seyde that Jankyn spak, in this matere,
As wel as Euclide [dide] or Ptholomee.
Touchynge the cherl, they seyde, subtiltee
And heigh wit made hym speken, as he spak;
He nys no fool, ne no demonyak.
And Jankyn hath ywonne a newe gowne—
My tale is doon; we been almoost at towne. (2288-94)

かくして Thomas は、cherl どころか “heigh wit” (=powerful intelligence) (2291) を持つと人々が認める結果となる。

人々は Friar について Thomas の語ったことは真実であることを認める。Friar の “ire” と Thomas のそれからは、結局 Friar の偽善と強欲さが証明さ

れる。“He bereth hym so fair and hoolily” (2286) とは Friar への語り手 Summoner の痛烈な皮肉の一撃なのである。

6

屁の平等な分配方法を論じるというのも変な話だが、この屁というものによって、Friar に纏わるアイロニ及び Friar の真実に見て取れるように、見掛けは preacher と confessor という立派な宗教者でありながら、実際は空虚な偽善者として私利私欲に走る姿が聴衆（読者）に暴露されてくる。つまりこうした矮小化された馬鹿馬鹿しい論理問題は、“The Summoner’s Tale” が “ire” に纏わる Friar の「偽善と欲望の話」であることを、端的に物語っているのである。

注

- 1) 托鉢修道士は托鉢修道会 (mendicant order) に属し、世俗の世界へ托鉢に出かける。通常二人連れで、ただしその任に就いて50年たてば一人で出歩くことが許される。托鉢修道会は四つあった：the Carmelites, Augustinians, Jacobites or Iacobites (Dominicans), Minorities (Franciscans)。
- 2) friars は、世俗において preachers (説教師) と confessors (聴罪師) の働きをする。ただし friars が confessions (告解) を聴くためには、教区の bishop の認可を必要とした (L. D. Benson, p.808, note to l.209; p.877, note to l.1714)。friars が教区教会で説教するには地域の司祭 (priests) の許可を得るか、教区の司祭の認可を必要とした。Cf. “the Friar’s cultivation of the rich (particularly women), his giving of easy penance, and his successful begging” これらが当時の friars の特徴である (L. D. Benson, p.808)。
- 3) 原文引用は全て Larry D. Benson, *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. (Boston: Houghton Mifflin, 1987) に依る。括弧内の数字は、行数を表す。